国語表現—原体験から経験へ・書き綴る情念について—

長崎県立島原商業高等学校
片桐啓恵

はじめに

—— 一通の手紙から ——

「片桐先生、お元気ですか。お久しぶりです。私のこと覚えてらっしゃいますか？　川棚高校にいた時、先生から古典をおそわった山口優子といいます。先生から頂いた第四詩集『かたくなに、したたかに』を読み返しては、先生のことを思っています。

私は今、保母として福岡にある保育園に勤めています。初めての一人暮らしで、なんとなく物寂しい夜は、先生の詩集を読みかえします。

今、なにもかもが新鮮でもの凄い刺激となり、神経も疲れるけど、自分をみつめることができることが何よりも嬉しい日々です。高校の時、自分を自分で所有できなかった（といえばおおげさかな？）私。自分の価値観も物の考え方もすべて否定していた、というより、捨ててしまっていた私だったから、今、一つ一つ、捨ててしまった大切なものが何だったのかをさがしています。

でも、捨てきれなかったもの、これだけは時の流れにおし流されても離したくなかったものがあります。（あのもの凄い渦の中でさえもこれだけはしっかりつかんでいたものです。）それは、片桐先生との出合いであり、先生から受けとった先生の生き方を綴った詩集です。片桐先生とは、三年程も離れ、会っていませんが、先生の詩集を読むたび、〝生きること〟について〝人間の心のさまざまな叫び〟を感じつつ、考えつつ自分をみつめようといつもそこに向かっています。傷つくことを恐れる私がそうたやすく変われるはずもないのですが、何かの感動を受けるたびに〝私も人間なのだ。同じ人間として、他の人間の気持ちをくみとれ、イメージ化し、自分自身をみつめなおすことができる〟というなんとも言いがたい気持ちで満たされることがあります。そんな喜びを、生活の中での体験と先生の詩集で一つふくらませるたびに、自分が一つ好きになれそうで……

とりとめのないことを書きました。

先生にもっと近づきたかったという後悔と、先生に頂いた詩集が

私の強いささえとなっているお礼がいいたくて、こんなきたない文字でこんな乱文をかきました。

お仕事ずっと続けて下さいね。では、お元気で。」

今年六月末に届いた、本当に思いがけない卒業生からの手紙だった。大きなクリクリした瞳の、リンゴのようにきれいな赤い頬をした彼女の顔を思い出しながら、この手紙に感動して読んだ。「思いがけない」と言ったのは、特に何か問題を抱えて私が深く関わったとか、クラブで深くつきあったとかいうことのない、授業だけでつながっていた多くの生徒たちの一人にすぎなかったからである。それだけに、前任校を離れて三年もたった今、私の転勤先を調べて送られてきたこの手紙への感動はひとしおだった。

しかし、このレポートの冒頭にこの手紙を引用して私が述べたいこと、この手紙への私の感動の原点は別にある。

なんとしっかりしたことばで自分を把え、綴るようになったのだろう。私と彼女が離れていた四年間の（私は彼女の高校一、二年の時しか授業していないから）、彼女の成長の大きさを思う。

受験体制、自己を抑圧する多くのものの中で、もがき苦しんでいる一つ一つの魂がある。そのもがきを、直接私にぶっけてきた者たちもいた。私のこれまでのレポートは、そのような生徒たちの作品によって成り立っている。山口優子さんは、私には直接目に触れぬところで、自分なりにもがえていた一人だったのである。彼女のすばらしさは、その苦しみを手離さなかったこと。今、自分を生かす新しい生活、仕事を得て、心がいろいろなものに反応することに彼女自身が目を見張っている。自己の変化への驚き、喜び、それを誰かに伝えたいというあふれるようなエネルギーがある。

文章を書くということの「原点」がここにあるのではないだろうか。

書き綴る〝情念〟について考えてみたい。ここに焦点をすえることで、文章表現のダイナミックな構造がみえてくるのではないか。

一、原体験から経験へ

――「学習」の構造と書くことの意味――

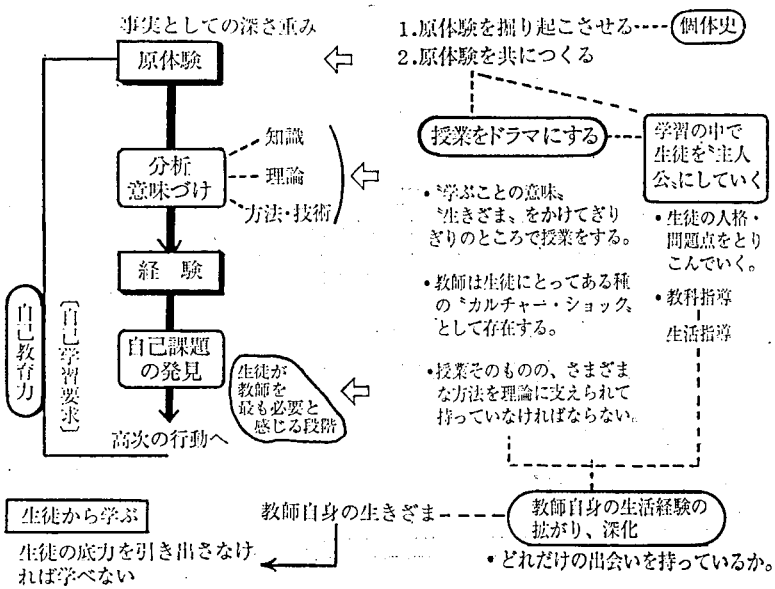
人はそれぞれの原体験から出発する。ただし、「体験」そのものは単なる「事実」であって、それに「分析」が加えられ、意味づけられた時に初めてその人の中に蓄積される「経験」となる。分析され、意味づけられた「経験」からは、現在の自己への認識が生まれ、自己課題が明らかにされる。自己を高めるために何を吸収しなければならないかという内からの学習要求がここから生じる。

「自己課題」を克服するために、その人は当然さらに高次の行動を自身に要求しなければならない。その行動は価値あるものとして「選択」され、それがまた一つの原体験となっていく。この過程を繰り返しつつ、少しずつ自己変革を行いながら生きていくことが、教育の目指す「自己教育力」を持つ人間を育てることになる。

■　三段階の教師の働きかけ

おそらくすべての学習活動が前述の構造を持そだろうが、特に「書き綴ること」による「自己表現」は一つの文章の中にこの構造

「学習」の構造を左図のようにまとめてみた。



をしっかりおさえることによって成り立つ。「書く」という作業は、他のどんな言語活動にも増して、「生きること」そのものと関わり、自己と対峙する作業である。それだけに苦しい。しかし、逆に「自己変革」と「自己解放」を伴わない文章表現活動は書いた当人にとって何の意味も持たないだろう。

この「学習」の過程において、「仕掛人」「必生助け人」としての教師の働きかけ（教育活動）には三段階が考えられる。

第一段階…「原体経」を掘り起こさせる。「原体験」を共につくる。

第二段階…「原体験」を「経験」に転換するために必要な〝知識〟〝理論〟〝方法・技術〟を示す。（一般に「授業」と呼ばれているものの大部分はこの段階を行っている。ただしその授業の位置づけが不明確なままに）

第三段階…生徒が「自己課題」を発表し、内なる学習要求によって自ら学び始めた時、教師は、この時こそ、力量を問われることになる。生徒が「取け人」としての教師の存在を切実に必要とし始めるのは、この段階であろう。

〝行動〟を伴う表現活動

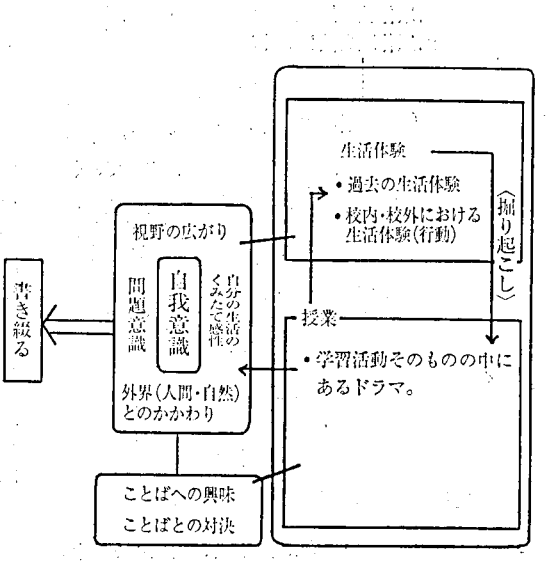
常に感動から出発しよう。書くことは、自分を揺り動かすことだ。私は生徒にこう提言する。

感動がなければ、表現のエネルギーは生まれない。私たち教師の表現指導は、「感動をつくること」から始めなければならない。従来、「表現指導」と呼ばれていた「書くこと」そのものの指導だけ

でなく、それ以前の段階から始めなければならない。

「取材」と呼ぶ作業は、書くに値する材料を拾うことだが、自身で感動を把える力の弱い生徒を目の前にして、私は、彼らの過去の生活体験の中から本人と共に事実の重さと深さを〝掘り起こす〟作業を授業の中に位置づけなければならないと思う。

その作業の中で、生徒の生活体験の貧しさという壁につき当たる。そこで、さらにそれ以前の、共に「原体験」をつくることの中には、授業の中の学習活動そのものをドラマにしていくことを含む。また、



学習によって得た知識理論・方法・技術によって実生活をとらえ直す。そうして、次の行動に移る。特に校内における行動は、教師と生徒との共生の要素が強い。

二、学ぶことのドラマから

「表現指導」そのものとは言えないが、「学ぶこと」を通して心の中に湧き起こったものを、生徒たちがいかに情念に満ちた文章で綴るか、少し例をあげておきたい。

▒群読「『平家物語』の群像」を終えて

(一九八二年度　二年)

(省略)

■大久保昭子の場合

火傷、軽非行、登校拒否から高校生平和ゼミの中心メンバーへ——現実逃避の文章から自己変革の文章へ

(一九八三年度　一年)

彼女は自分の名前「大久保昭子」を御悪苦墓我輝虚」と書き、「話のタネのノート」というタイトルを「破奈思の誰音・悩吐」と書いていた。

幼い頃に負った火傷の跡が、顔半分、上半身、片腕に大きく残っている。入学して来た時から、教師たち、特に担任は気をつけていたが、入学直後提出させる「生育史」を読んだ限りでは、「大丈夫ですね、かなりしっかりしているようですね」と担任も安堵したほ

どだった。ところが、しっかりしているどころか、一年間、担任は彼女に振りまわされることになる。

兆候は、数学・簿記・珠算などの特定の授業をさぼることから始まった。怠学は加速度的になり、彼女の姿が見えない日は、担任（若い、英語の女性の先生）は空き時間に探しまわるということが続く。

ついに一日さぼった日の夜（朝、駅で降りたところまでは級友が目撃している）、彼女から私に電話してくる。

「今日一日、どこにいたかわかりますか……雨が少し冷たかったな」

「市営テニスコートか」

「どうして、わかるんですか」

「島原の町の中で、あんたが行くところはあそこぐらいしかなかろう」

「何してたと思います」

「さあ」

「わかったら、生活指導部あたりがうるさいだろうな」

「ほお…煙草はうまかったかい」

「……」

「思わせぶりなさぼり方するんじゃない。私は問題児です。どうぞ誰か私を見つけてください。——そんな登校拒否なんざ、側で見ててヘドがでるよ。一日学校さぼって、雨にぬれて、何かいいことありましたか」

「何も。ただ、緑がきれいだった。」

「それは上等。煙草の代わりに、もっと緑を胸一杯吸ってくるんだったね。明日は、私の顔を見に学校へ出てくるでしょうな」

「はい、国語ありますから」

確かに、彼女は国語は欠かさず出席した。この時の電話や、私や担任に持ってくるノートの文章で、彼女は自分のワルぶりを見ぬいてもらおうと、チョコチョコ小出しにしてみせる。喫煙も万引きも怠学も、既に中学の時から経験していた。一方では、高校一年としては比較的本を読んでいる方で、かなり言葉を操ることができる。また、火傷という重荷を背負って一六年間生きてきた分だけ、感性の鋭さも持っている。が、数学をはじめとする学力のつまずき、劣等感、そしておそらく、火傷というハンディから甘やかされて育った性格の弱さ、母親への軽蔑——これらがからみあって、彼女は、学校の休制教師のふがいなさ、学習内容の貧弱さを批判しつつ、自身は怠学へと逃げ込んでいく。

彼女は、人を見るとき、相手を探るような目つきをする。そして、何とか相手の弱点を見つけて、優位に立とうとする。教師に対する口のきき方も、驚くべき横柄さである。それは、彼女の育ち方の問題でもあり、コンプレックスと背中合わせの哀しい姿でもあった。

ある時、担任から怠学を諭され、自分が嫌なものに対しても耐えるということを身につけなければならないのではないかと言われて、彼女は担任をじっと見て、こう返した。「耐える？先生、私は家を一歩出た時から絶えず人々の好奇の視線を耐えているんですよ。先生にわかりますか。これ以上、何を耐えればいいんですか」この言葉に対して、もう何も言えなかったと担任は語った。

また、ある時は、ふいに掌を間いて見せる。そこにはナイフで切り裂んだ無数の傷がある。ただし、本気で血を流す気で切ったのではない傷が。

私は彼女に、中学から高校にかけて登校拒否であったかっての自分自身の姿を見る。

彼女が授業を抜け出したりする度に、担任の熊先生と私とで交互に鬼になり仏になりして話をしていたが、つまずきの根は深かった。エラソーなことを言ったり書いたりする割には、人の言葉の真意をくみとる力が弱い。自己変革の行動を全く経験していないために、精神構造の実際は幼く、本人はその幼児性を自覚しないままに、ことばだけの現実批判が先行するという、言語と精神主体のアンバランスを生じているのだった。

ある日、図書室の書庫の中に呼んで、私は彼女の胸ぐらをつかんだ。

「本気で自分を変える気があるのか」

彼女は唇をふるわせていた。

「……変わりたい。でも、どうしていいかわからない。もう、自分のことがわからない」

「甘えたことをぬかすな。他の人ならともかく、いやでも自分の火傷と自分の心を見て十六年間生きてこなくちゃならなかったあんたが、今さら、自分のことがわからんなんて言いぐさは通用しない。わからんのじゃない。あんたは自分の醜さから逃げてるんだよ。

あんたの汚さはね、学校さぼったことでも、喫煙でも万引きでもない。自分の火傷を逆手に取って生きてるってことだ、自分がどんなに悪いことしても、結局、最後の最後までは誰も自分を責めてこない、この火傷のために、自分の心の中まで立ち入ってくることを皆手控えると知っているんだ。あんたは、その根本的な汚さをかくすために、タバコや万引きやサボリという程度の軽いワルをしてみせて、私は問題児でございますという顔をしてみせる。実に汚い！。

土台、何を甘ったれて生きてるんだ。自分の苦しみを人にわかってもらえないことをグズグズ言い続けるとは甘ったれるのもいいかげんにしろ。これだけは肝に銘じておけよ。あんたの苦しみをあんた以外の人間が理解することはあり得ない。絶対に。現実に、私はあんたの苦しみを自分のこととして感じることはできんのだ。どんなに心情的にそうしたいと願っても、私の体そのものにあんたの痛みを感じることはない。人間とは、そのように悲しいまでに別々の生き物だよ。

だがね、自分と闘い続けて生きる人間は、少くとも自分だけが苦しんでいるという思い上がりだけはしない。自分との闘いの苦しさにおいて、同じように闘う人間の苦しみは共育できるからだ。

私は、あんたの苦しみがわかるなどと言うつもりは毛頭ない。しかし、私は私の苦しみを持って生きている。九歳の時に母親に憎まれて以来、自分の血を呪いながら自分をつくり変えて来なければならなかった人間が、あんたの目の前にいるよ。十年以上を費して、少くとも、一五〇度近くは自分を変えて来た人間がね。

自分と闘うのは、あんた自身だ。私は何もしてやれない。ただ、私も自分と闘い続ける人間として、側にいてやれるだけだ。自分の闘いを見守ってくれる人間がいるなんて、ぜいたくなことだよ。あ

んたには、熊先生もいる。私には、誰もいなかったからね。」

「……」

「泣いちまえよ。今まで、なりふりかまわず泣いたことがないんだろう。いつも身構えて、自分の弱点を隠そうとして。本当にきれいな涙を流して、汚い心を流してしまえ」

三十分ほど、彼女は私の胸の中で泣いていた。私は黙って、その肩を抱いていた。

「自分が流した涙を裏切る人間は、私は絶対信用しないからね。どうだ、自分と闘うか」

黙ってうなずく。

「よし、それなら、自分を変える方法を教えてやろう。あんたの最大の弱点は、自分のことを自分でやるという生活の基盤ができていないことだ。メシをつくる、部屋のそうじをする、フロをわかす。自分の役割を決めてそれを続けることが一つ。

二つめは、小学校の何年かでつまずいている数学から逃げずに、がんばって克服すること。

三つめは、例のノートに書くのをやめること、あんたのことばは現実逃避にしか使われていない。自分が変わったと思えるまでは、文章を書くな。」

こうして、ともかく、闘いが始まった。『明日のジョー』の「あしたのための、レッスンその一」のようにこれは、彼女と私との「あしたのための、その一、その二、その三」であった。

さて、「あしたのための、その三」について、少し説明しておく必要がある。これが〝自己変革と文章表現〟の問題だからである。

国語の時間に「話のタネのノート」をつくるように指示したのがきっかけで、彼女は、思いや詩を綴ったノートを私や熊先生に見せに来た。そのノートは猛烈なスピードで綴られ、四月から七月までの間に四冊にもなった。学校への批判、特に一旦入部してすぐにやめたテニス部に対して、クラブの体制への批判。架空の非行少女の話。そして特に多いのは、ギリシャ神話や北欧神話の名を借りた詩。

このノートの問題は、四冊も書き綴りながら、それが彼女の心の記録になっていないという点にある。いや、そもそも、発展性のない同じような繰り言を四冊も書くということが、病的なのだ。それはおそらく、この四冊にとどまらず、中学の時から、やはり同じようなことを書いていたのだろうし、私が書くことを禁じなければ、この後、何冊でも書き続けただろう。

私自身、中学一年から二年にかけて、登校拒否をしていた時、一冊のノートに自分の思いを詩にして吐き出していた。それは、とうてい〝詩〟と呼べるものではなくことばを吐き出していたにすぎないのだ。そして、一冊のノートが終わる頃には、自分が吐き出したことばの無惨さ、ウソ寒さに、自分自身で嫌気がさしてくる。何とかしなければならないと思う。自分を人に語るための的確な表現を身につけなければともがき始める。詩に関して言えば、〝詩になる以前の詩〟つまり、自己満足のことばの羅列で終わる詩と、〝詩になりえた詩〟惟いを人に伝える一つの方向性とエネルギーを持つ詩との間には一線があり、それをいつか越えなければならないのだと、自分の経験から考えている。

何冊ものノートに書き綴りながら、それが発展性を持ち得なかっ

た彼女の場合、文章は「自己解放」と「自己変革」をもたらすものになり得ず、「現実逃避」「自己閉塞」の道具だった。

そのノートの中から、彼女の文章を一つだけあげる。

熊先生へ

先生、今、私は考えています
本当に色々なことに対して
私は　生きてきました
それはもう精一杯に　ギリギリのとこで
周囲と自己と戦って
傷つき、傷つけながら……
そして　これから先は
一体　どうなるんだろう？
どうやって
生きていけばいいんだろう？
私は　生きていくのに
自信がない……
人は　誰しもみな
そうなのかもしれないが
明日という日さえ
どうするものなのか
見当すらつきません
ただ、眠り、目覚めるだけです
私には　他人に何かを
与えるだけの力がありません
今、自分が存在していることを
確かめるのが精一杯なのです
もし与えることがあるとしたら
残酷なことだけですよ
私は高校に入ってから
あきらかに　変化した
今までの自分を
捨てたといっていい
高校に入学して
一週間目のとき
私は　深く傷ついた
泣くに泣けぬ日々が
それから幾日か
続いた……。
そのときは　先生
まだ　知らなかったでしょう

私は　その日から
仮面をはぎ取った
今まで　沈黙という名の
自分を守るための
仮面を自らの手で
はぎ取った
それまでの私は
とても今のような人間ではなかった
もっとも中三から
仮面の一部は　はがれていったけれど
小学校から中二まで
私は　まったくオリコーサンだった
生まれてすぐに　このようになったせいか
物心ついた時から　人の好奇の目にさらされた
街を歩いていても　病院の中を歩いていても
すれ違う人々は　みな物珍しく見て
そのあとに　もう一度
ふりかえる……
幼い私には　それが
なぜなのか　わからなかった

すれ違う度に、毎度そうなので
（あっ、まただ……）そう思うしかなかった
その時　ふと見た母の顔は
まっすぐ正面を見ていた
（怖い……）と思った
その母の気持を　私には知ることができなかった
おそらく母は
私よりも　やりきれない思いをしただろう
母が人と話をしているときも
私のことに　目が向けば
「かわいそうね　こんなに小さいのに
お母さんをうらんじゃだめよ　強く生きて行きなさいよ……」
――と　どの人も同じように言い
そして、もう一方で　好奇の目を向けていた
だから　私は　自分以外の人を
あまり　好きにはなれなかった
私は　いつも外に出た
幼年期をほとんど病院で過した
その中庭や長崎の街で
日々を送った

お正も七夕もお盆も
病院で過した
春、夏、秋、冬
すべてを体中で感じた
誰とも話さなくとも
私は自己の内に語りかけ
自然の中で　自分をさらけ出し
心の思むくままに　生きていた
その頃のことを　私は　はっきりと記憶している
それを書くとしたら　おそらく三〇〇枚にはなるだろう
おそらく、いや、はっきりと言える
私の人生のうちでもっとも幸せだった日々だろう
今の私の土台は
この時に　造られたのでしょう
小学校へ入学してから
私は　第二の非難に会った
はっきりと〝周囲〟というものが
私の目の前に立ちふさがった
小一なんて　まだ幼い
男の子などは　乱暴で　かまわずに

人の気も知らずに　ジロジロ見て
えげつもないことを言う
何と言われたか　もう　思い出したくもない
私は　人間とは　残酷なものだと思い
そして　生まれて　初めて
自分の存在を　憎んだ
小二〜小三　私はようやく心をひらきかけたが
なおも　他人との親交はなかった
そのときから算数が苦手で
まったくつまらないもんだと思っていた
逆は　国語やその他の教科は
好きで　その方面はよかった
小学校を通して
私は非常に泣き虫だった
ちょっとしたことで
すぐに泣いた
それは　中三まで
続いた
もちろん中三の頃は
言われて泣くのではなく

あらゆることに感じて
その先々に　自分を見出したら
涙が止めどもなく
あふれ出るのであった
私は　初めから
すべてをはねのけて来たわけじゃない
ああ　私がどんな思いをして
生きてきたか　わかるだろうか……
中学の時　私はまったく沈黙の人だった
中三のときに　誰かが言っていた
大人しい部類に
属していただろう
討論会や話し合いのときも
意見すら言えず　ひたすら見守っていた
個人の間では
ちょっとしたことは　言ったが……
信じられないだろうか？
それでも　今の私は存在するのだ
私は　中二、中三と
少しずつ

仮面をはぎ取る用意を
していたのだ
そして　真の自分の姿に
なろうとしていたのだ
誰にも　わからないように
少しずつ　少しずつ
そして　その反面
時の流れを逆のぼりして　なつかしい頃へ戻っていた
そして　今の私が
存在するのです……
私は　中二のときに
友人からこう言われました
「あんたは何でもぶっこわすのが特技だね」
……
確かに、あの時はそうだったろう
一生懸命にやりすぎて
大切にしたいものまでも
傷つけ、そして　嫌われたのだ

いつでもなんでも
「あんたが悪いんだろう！」
一言　反論すれば
「すぐ他人のことを言う。今さらいいわけにしかならない！」
私は　その時に
人間とは　こういうものなのかと
嫌でも　思い知らされた
傷ついたのは　その人たちだけではないのに
私は　わかってもらえなかった
一番わかってほしいと思った人にさえ……
私はそれらの非難に対して
いつも歯をくいしばって絶えていた
あるいは　そのくやしさを悲しさを
涙に流し、捨てようとした
歯をくいしばって絶えると
強情といわれ
涙を流して捨てようとすると
泣けばそれですむと思っている泣き虫といわれ
どうにも動きようが
なかった……

「泣けばそれですむ」と言われたのが
とてつもなく悲しかった
その人は　人前で涙を見せない
強い人だった
確かに　泣けばそれですむ
周囲は泣いた人に味方をし、一方に責めを負わせる
しかし、それはあくまでも周囲の見界だ
責められたくなくて　悪役にならせられたくなくて
そう言っているのでは
ないだろうか
本当に自分が正しいと思えば
相手が泣いても「泣けばそれですむ」なんて言わないだろう
私は同情をひこうと思って
助けてもらおうと思って
涙を流すのではない
あらゆる思いを流して
人をうらまないように
思いたいからだ
ひどいことを言われても
それを心に止めずに

涙で外に
押し流したいからだ
そうすれば心も軽くなる
その人を　うらむことさえ忘れてしまう
私は　そのために
涙を流してきたのだ……
理解者が一人もいないというのは
淋しく　哀しすぎる。
私は　どんなにして
生きていけばいいのだろう
本当に生きていけるのか
生きるすべはあるのか……？
ああ……
心が死にそうです
JUPITER!
……やはり自分で……

S58・6・27(月)AM10・56

これだけのことを綿々と綴りながら、しかもそれらのことばに真実の重さがなく、一見、赤裸々な告白のように見えながら嘘と虚栄に満ちているとしたら、ことばとは、なんと無惨なものだろう。

原体験の重さと深さを掘り起こすことは、ことばの嘘を引きはがしていくことでもあるのだ。その残酷な作業を、課かが一緒にしてやらなければならない。そのためには、自己変革の〝実践〟を避けては通れない。これは、一年ぐらいでケリのつくはずもない、彼女の精神の揺れにつきあいながらの長い長い闘いである。

彼女の問題行動については、担任と私とで公にならないように対処していたのだが、授業をしばしばさぼられる教科の担当者が直接教頭に告げてしまったことから、七月上旬、一学期期末考査前には、上から「方向転換」をすすめたらどうかと言いだすところまで来てしまった。彼女自身も、学科への自信喪失から怠学はますます激しくなり、放っておくと期末考査も受けないのではないかと思われる状態になった。このままでは退学か転学を強いられることになる。

期末考査直前の土曜日、私は彼女の家へ行き、もう後がないことを話した。学校の批判などする前に、学校から放り出されるのだ、致命的な不得意科目の克服は夏休み以降の問題として、今は〝やる気〟を明確な形で示すしかないと。彼女にしても、学校をやめたくはない。そのまま私のアパートに連れて帰り、土曜・日曜の二日間勉強させて、月曜日一緒に登校して試験を受けさせた。

その二日間、彼女を勉強に専念させるために、ふだんは自分のためにさえ三度の食事をつくることもロクにしない私が、せっせとメシをつくる。それに対して、彼女はいちいち、ピーマンの切り方が大きい、味がからい、玉ねぎはきらいだと文句を並べながら食べる。

自分が食べた食器の後片付けもしない。そこには明らかに、生活基盤の問題があるし、また、文句を言うことが、彼女の精一杯の甘えであった。

一学期の終業式の日、彼女が「高校生平和集会に行きたい」と言ってくる。高校生平和ゼミと高校生平和集会については、折にふれて国語教室通信に情報をのせ、授業の中でも話していた。彼女自身、変わるきっかけを何とかつかもうとしていた。

さっそく長崎高校生平和ゼミの世話人である広瀬先生、萩谷先生に連絡をとり、「お客さん」としてではなく、仕事を与えてもらうようにお願いした。

昨年の八月八日・九日、長崎には全国から約四〇〇名の高校生が集まった。島原からたった一人参加した彼女は、その熱気の中で全員で感動して帰って来た。あんなに生き生きとしている高校生たちがいることを初めて知った。島原にも平和ゼミをつくりたいと。

平和集会報告のために国語の授業を一時間やることを私は約束した。

「ただし、平和ゼミをつくろうとあなたがクラスのみんなに呼びかけて、みんなはそれに応えてくれるかな」

首を振る。

「なぜ?」

「私はみんなに信用されてない」

「そのとおり。それでも、平和ゼミをつくろうと呼びかけたければ、あんたがしなければならないことは何だ」

「私のことを、みんなに全部話す。私も信用されるようにがんばってみる」

「そうだ。自分のことをまず全部さらけ出さなくちゃだめだ。そして、あなた自身が変わっていく姿を、クラスのみんなに見てもらうことだ」

さらにもう一つの条件として、二学期中間考査までは授業の流れの上で切れないから、それまで今の精神の高揚を持続する努力をしなければならないとつけ加えた。それまでに発表の資料と原稿を用意しておくよう指示した。

彼女一人が変わるためには、クラスの四四名のお嬢さんたち（商業科女子クラス）が変わらねばならないのだ。

しかし、彼女は精神の高揚を持続できなかった。中間考査で、また教学の欠点を取り、学校を休んだのである。その後も、数学は彼女にとって最大の足かせとなる。立ち直ろうとしながら、試験の前後は極度の不安定状態になるということをくり返す。

休んだ翌日、私は彼女を呼んだ。

「明日は約束通り、報告のために国語の時間を空けてある。だが、昨日やったことは何なんだ。いつまで同じことをくり返す気か。明日、報告をするのかしないのかよく考えて、今日中に返事しなさい」

彼女はボロボロ涙を流した。

「今さら泣いてもどうにもならんよ。やるのか、やらんのか、あんたが自分自身をどうするのか、その覚悟の問題だからね。私はどっちでもいいんだ」

考えさせてくれと言った。その日の放課後、「報告をします」と、

怒ったような口調で言いにきた。

翌日の国語の時間、四十分間、彼女は一気に語った。平和集会の感動、自分が中学の時から何をしてきたか、今、皆に何を伝えたいか。

クラスの者は彼女の行動を見て、彼女は自分たちとは違う存在なんだと思っている。そのクラスのみんなと彼女とがつながるところから出発しなければならない。

四十分にわたる報告と告白を、四四人は驚きの目を見開いて、かたずをのんで聞いていた。しかし、彼女はやはり虚栄心を捨て去ることができず、肝心のところでごまかしの告白をした。それでも四四人にショックを与えるには十分だったが、私はその後、彼女がごまかした部分を本人と四四人を据えて指摘した。そして、彼女が平和ゼミ結成を呼びかけたこのクラスで変われなければもう変わるチャンスはないだろう。これだけはっきりした一つのチャンスを目の前にして、互いを変えあう集団になれないとしたら、よほどくだらない人間の集まりということだ。仲よしこよしの集団からは何も得られない。彼女の語ったことに対して、あなたたち一人一人はどう応えるのか、と話した。

次の時間、平和集会のスライドと原爆のパネル写真を見せ、単元〔人が星空を見るとき〕から文化祭に発展させるための群読に入った。群読は原爆瓦と高校生平和ゼミの活動、それに原爆詩を構成詩にしたものに合唱を加えた。この群読の練習の程過で、クラスは変わっていく。

そして、島原商業に平和ゼミが生れた。

その後も、大久保自身は順調には立ち直れなかった。しかし、平和ゼミのメンバーがしだいに固まってくる中で、彼女を支える仲間ができはじめる。冬休みに入ってから自殺未遂などやってくれたが（進級できるかどうかという不安がつのってきたため。ただし、本気で死ぬつもりではない）、三学期以降は一度も休まず、数学も追試でがんばりを見せて、少し自信をとりもどした。

彼女の変化の一つは、人を見下し、優位に立とうとするいじましさが消えたこと。ある意味でフツウの高校二年生になった。今、学校では、わずか三人しか長員のいない新聞部の中心として、そして平和ゼミの中心としてがんばっている。

彼女が本当に自分の過去をとらえ直すには、まだ、もう少しの時間ともう少しの成長、自己を高めるための行動を必要とするだろう。

最後に、三月につくった島原平和ゼミの文集から、彼女の文章と私の文章をあげておく。彼女の文章が、以前に比べて、ことば遣いなど同じように見えるが、素直になりつつあることが読みとっていただけるだろうか。

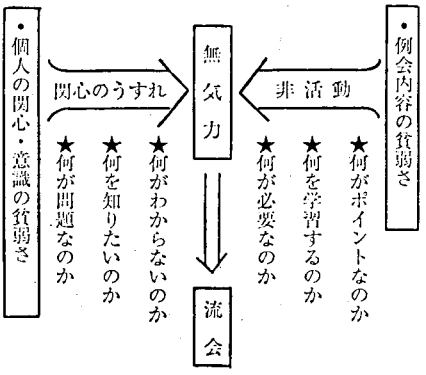
形にできないものへ

大久保　啓子

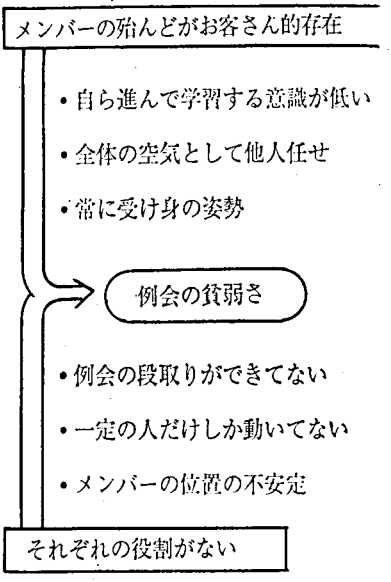
昨年、11月に結成して以来、何ら形に残るものが、はっきりいって、ないのである。最初からうまく行くはずはない。引きずられるままに、うやむやに過して来た。そこに自分達の甘さといい加減さがある。堅いことを言う気はない。だけど、やは

り反省めいてへる。メンバーの数が問題なのではなくて、むしろ内面的なことなのだ。流会続きになった原因は、例会にポイントがないのは、それらの根本的原因は、何なのか？一番、曖昧にしてはならない重要な部分なのだけど、自分達は、既にそれを気にしながらも、それに対して、すぐに対処しなかった。ややすると受け流していたこともあるだろう。今、その敏感な部分に切り込んでおきたい。不明瞭な点を残したまま先に進んで、不完全燃焼を起こしたくはない。それよりも、痛いところを敢えて解明しておく方が、さっぱりしていいと思う。

流会については、もう殆んど考慮することはないのだが簡潔に触れておこう。



例会そのものに触れてみると、今までなぜうまく進まなかったか、わかってくる。メンバーの気持ちにもやはり触れざるを得ない。



以上、簡単に触れてみたが、やはり、大切なのは各個人の気持ちであることがわかると思う。何にせよ、自分がどう感じ、どう考えて行くか、なのだ。こればかりは他人は、どうしようもない。自分の思考回路は、自分が点検するしかない。ゼミは、それに少しばかり、役立つことはできます。また、身近な所から見出す、ゼミでありたいと思うのです。

色々とあったけれど、流会もいい経験だと思います。少なくとも、これからやって行くのに、いい指標であると言えるでしょう。同じ反省を二度くり返すというのは恥しいことだから、

これからしっかりと確実に、ひとつひとつ積み上げて行けばいい、そして、いつかそれが、自分がどう動いて行くかの土台となるだろう。更に、人とのつながりを作って行けるようになれば、何より大切なものを身につけたこととなるでしょう。

私自身、ゼミをやって行く上で、それが、これからの自分に何らかの形で、生きる力となれば幸いだと思ってます。自分の持てる力のすべてを形にできないものへ――。

Cly out for peace.　　1984. 3. 16.

やる気を支える「形」

片桐啓恵

「やる気」があるか、ないか。「問題意識」があるかないか。そこが問題であるという言い方をよくする。確かにそれは、重大な、根本的な問題なんだが、「やる気」ばかりいくらあっても、それをきちんと積み重ねていく「方法」を身につけなければ、自分自身の「やる気」を支えることはできない。

少しくどい言い方になった。具体的に述べよう。

課だって楽をしたい。しかし、一方、充実感のない生活には焦立ち、虚しさを感じる。その両極の間で揺れながら、どちらかに傾く生き方を選んでいく。平和ゼミに集まってきたメンバーは、おそらく、〝平和〟に強い関心を抱いていたからではなく、〝何かをやりたかった〟から行動を始めたのだろう。何か問題をつかんで、自分の意志で動いて、高校生活の充足感を味わいたかったのだろう。

文化祭の群読という一つのきっかけから始まった平和ゼミは、当然のなりゆきとして、精神の高揚を持続できず、人が集まらなくなった。この時、一人一人の「やる気」を点検しなければならなくなった。スタートは、ここからなのである。

「やる気」のある人の心と心をつないでいく仕事は、根気のいる仕事だ。そのときこそ、〈ことば〉を駆使した具体的な行動力が必要なのだ。

例えば、討論の力。――の人話を真剣に聞き、要点をつかむ力、自分の考えをまとめ、的確に表現する力、討論の柱にきっちり沿った討議を展開する力。多くの意見の方向性をまとめていく力。課題を見抜や、明らかにする力。

例えば、通信や機関誌をつくる力。――通信を出すことは、例会ごとの総括であると同時に、出席できなかった人への心づかいであることを忘れてはならない。諸連絡を確実に行うことも、「やる気」を支える不可欠の能力である。そして、やったことは、必ず「形」にして残していくこと。機関誌、写真、テープなど、工夫しだいで方法は広がる。

例えば、学習する力。――討論を深めていくには資料がいる。例会の回数を重ねるにつれて、協力して、有効な討論が展開できるように一人一人が力をつけるべきだろう。「手づくり」の学習をすすめていくこと。そのとき、「やる気」が生み出し、自分自身の手でつくったものが積み上げられていく喜びが実感で

きるだろう。

「やる気」は確実に行動に移し、必ず「形」にして残していく。〝平和〟はそのような人間としての実力によって支えられる。

「学ぶ」ことの意味をつかむための十時間クラス全員が本音で語り始めるまで――「学ぶ」ことの意味に関する小論文――

（一九八三年度　一年三組）

昨年の十一月半ば、一年三組（商業科・男子一八名、女子二七名）の授業を打ち切った。単元〔人が星空を見るとき〕の最後の教材「浅茅の宿」の途中である。

理由は、授業への無反応の度が過ぎること。彼らは、授業中じっと坐っている人形にすぎないのであり、何も見ないし何も聴かない。手は自動的に板書を写しているだけ。そのノートのどこに何を書いたのかさえも覚えてはいない。

新任以来、私の仕事はすべてそのような生徒たちとの対決だったから、少々の反応のなさぐらいでは動じないが、さすがにこのクラスに対しては、最後の勝負に出なければならない時に来たと感じた。

ネクラと言われたこの学年の中でも、特に三組はクラく、バラバラだった。男子の中に、生気のない、目つきのすさんだ者が何人か目立った。UFO三人組と呼ばれた坪内、園田、松本は、髪・服装から早くも目をつけられ、ツッパリというにはかわいい部類であったが、教師に幾度かなぐられていた。

そのような条件があったにせよ、クラスの状態が悪化するにまかせていたのは、担任と副担任であった私双方の責任である。新入生の中の手のかかりそうな者が偶然このクラスに集まってしまったにもかかわらず、入学直後から、担任は校務分掌の多忙さに手をとられて、クラスをまとめることが全くできなかった。私は私で、（本来、あってはならないことだが）一年の持ちクラス三クラスの中で、三組だけ担任と根本的に考え方が合わないために、これといった手を打てないでいた。総合単元〔人が星空を見るとき〕から文化祭へ発展させた学習活動の中で、学習集団づくりに賭けたのだが、私の組んだ学習内容が甘かったために、一部のグループを除いて成果をあげずに終わった。その文化祭後のことである。

「もう、形だけの授業はやめよう」そう私は言った。「私が授業しなくなったら、君たちは、おしゃべりするか、寝るか、ボケーッとするか、内職するだろう。今、授業しててもそれと変わらんわけだ。だったら形だけ学習する振りをするのはやめようじゃないか。ありのままの状態にもどそう。君たちは好きなことをしていいよ。私は自分で本を持って来て勝手に読む。ただし勉強したい人がいて、質問があったら遠慮なく来てください。学ぶ人のためには惜しみなくつきあいます」

この方法はこれまでにもやったことがあるが、ほぼ三時間か四時間で生徒は動き始める。授業は彼らの〝権利〟なのだが、その授業がなくなった時、彼らは初めてウロタエ、自分にとっての授業の意味を考え始める。私は彼らの〝権利〟を奪った者として彼らの前に立ち、一旦、吊しあげにあわねばならない。そして、彼らとのケン

カを始める。

ただし、このクラスの場合、三〜四時間ではケリがつかないことは覚悟しなければならなかった。おそらく、いよいよとなれば、二週間後の期末試験まで取り込んで試験ができるかどうかという極限状況をつくって追い込まなければ、彼らは考え始めないのではないか。それがいかに危険な方法かは承知で、やはり他に方法はないと思えた。ここで勝負をかけるか、このクラスをもはやあきらめるかのどちらかであった。

授業打ち切り宣言後十一時間の経過は、紙数の関係で割愛する。

全員の本音が出たところで、「勉強する気になれない」という者もいた。「今まで十五年間これで生きてきたものを、変われるわけがない」「自分たちが無気力でダメなのはわかっている。しかし、自分たちをこのように受け身の人間にしたのは大人であり、これまで九年間の教育ではないか。自分たちはどうすればいいのか」それは半ばツッパリでもあり、半ば本音でもある。無気力さに焦立っているのは、誰よりも彼ら自身なのだ。そのもがきの姿を、十一時間めにして、私は目の当たりにする。

「十五年間これできたものを変われるわけない」と言ったUFO三人組のボス格、坪内に、私は言った。

「それは、君たち以上に、我々教師が自分の仕事から逃げ出したくなった時に使うことばなんだ。だけど、変え合い、変わり合わなければ、人間と人間の出合いは無意味だろう。十五歳にもなったものを今さら変えられるはずがない。そのことばを決して言わないことが、私の教師としての、自分との闘いなんだ。

坪内、君は、今のままの自分の生き方をカッコイイと思ってるか」

「いいや」

「そうだな。君の中に眠ってる可能性、力を引き出して、もっとカッコイイ生き方ができるんじゃないか。変われと言うのは、君にそういう生き方をしてほしいと言うことなんだ」

今後の対策として、私は二通りの案を出していた。途中で中断している「浅茅が宿」を終え、他のクラスとの共通問題で期末考査を行うには、あと二時間補充すればいい。明日土曜日の放課後、または試験に入ってからの放課後（国は三日め）でも、一時間ずつ補習をすれば十分間に合う。しかし、放課後の時間を使うというのは、君たちにとっては何らかの犠牲を払うことになる。それでも、自分たちのやる気のなさでロスした時間は自分たちで取り戻すという方向に、全員の心をまとめることができるか。それができない場合、試験は、半分だけ他のクラスとの共通問題で、半分は小論文ということにする。

翌日土曜日の放課後、宇土が全員の意見をまとめることができませんでした。女子全員と男子五人が残っていますが、補習をしてもらえますかと言って来た。全員参加でない以上、試験に出すことはできないよ。試験に出る出ないにかかわらず、自分たちが勉強したいというのであれば、もちろん私はつきあうよ。それでいいのかとたずねると、はいと言う。その日、三十三名で補習をした。

一年三組　二学期期末考査について

○テスト内容

□単元〈人が星空をみるとき〉プリントより

日本語のなかの星――歳時記より――P・27～P32

漢字の書きとり、読み、語句の意味（季語の説明文をよく読んでおくこと）

俳句における季語の役割

俳句の鑑賞

「浅茅が宿」P・34～P・40ℓ・5

読み、語句の意味、文法（プリントの注を丁寧にみて復習すること）

内容の読みとり

□「学ぶ」ことの意味についての小論文（西洋紙半枚程度の長さ）

○次のものを材料として、「学ぶ」ことの意味について、自分の考えをまとめよ。

○国語の十時間を通しての三組の姿

○『学ぶ』とは、卑小な自分を誠実に滅ぼしつくし、自己を新たにしていく営み」（林竹二）

○次の文章

ちょうどその頃、私は東京大学附属中高等学校の校長をつとめていました。教授兼任であるうえ、学部長でもありましたので、生徒たちに十分なこともしてあげられなかったのです。その埋め合わせ、つぐないといってはなんなのですが、中学二年生の特別ゼミナールを担当することにしました。テキストはイリーンの『人間の歴史』でした。それまでの私自身の人間研究と重ね合わせて、必要な説明や助言をしながら読んでいきました。

三年間続けたうちのある年の学年はじめの頃と思いますが、一人の少年が「人間はどうして二本足で立って歩くようになったのですか」と質問しました。これは大問題です。イリーンもそのあたりのことは十分に書いていません。むろん私にもよくわからないので、この次の時間までに調べてくるから、それまで待ってくれといいました。さて書斎や研究室、図書室などで、それらしきことの書いてありそうなものをいろいろ当ってみたのですが、なかなかうまい答がありません。いくらかあることはありました。人間は眼の発達した動物で、大昔森に住んでいた。それがある事情によってサバンナにおりてきた、そこには背の高い禾木科の植物が生い茂っていたというのです。眼の発達した動物が、そのサバンナで生きていくには、敵から身を守るためにも高い姿勢がのぞましかったからというのです。もっともにも思えますが、私にはどうもこじつけに感じられました。また禾木科の植物は実を高いところにつける。これを採るのに高い姿勢が有利だともありました。これも食にかかわって切実とはいえ、私の胸におちるまでにいたりません。

一週間はすぐに経ってしまいました。自信もないまま私は生

徒たちの前に立ち、とにかく調べたことを伝えはしたものの、けっきょく私にはよくわからないのだと、正直に告白しました。もうこの辺でかんべんしてほしいといおうとした時に、ふと頭の中をかすめるものがありました。そこで生徒たちに向って、私はこう考えるといったのです。人間が二足直立歩行にうつったのは何故か、それは人間が「その気になったからだと思う」といってしまったのです。誰も反応しないだろうと思ったとたん「先生、人間はやる気になったんだなあ」という感嘆の声が一人の少年からはねかえってきたのです。私は改めて、これはほんとうかもしれないと思いました。

人間の二足直立歩行成立の原因・条件については、まだまだこれからいろいろな研究が重ねられていくにちがいありません。私の生徒への答は、そういう意味では答になっていないのです。ただ私がいいたかったのは、二足直立歩行のような不安定な姿勢は、ある種の目的意識なしには持続できないということです。その意味ではこの行動様式は、人間が選択することではじめて成立するのではないか、赤ちゃんも単なる遺伝や大人の所作をまねるだけでなく、自らその気になってあの姿勢を選んでいるのではないかという仮説なのです。言語の習得もオウムのような反射なものではなく、高度の選択活動だというべきです。二足直立歩行や言語のような、人を人として特色づけているとっておきの行動様式も、このように選んで獲得されるものだとすると、人間性というものは、はじめから与えられてあるというより、出生後に選んで獲得されるものだというべきでしょう。

（岩波新書、『教育は何かと問いつづけて』大田堯著より

傍点—原文、傍線—引用者）

○小論文の評価の観点

・自分分身を直視しているか（過大評価も過小評価もせずに）

・材料から自分なりの意味の発見ができているか

・考えが論理的に述べられているか

・文章の構成力・文字力・表現力

期末テストの小論文は、どれも読みごたえのあるものだった。そのうちのいくつかをあげておく。

坪　内　省　二

「あなた達は、檻の中のダチョウだ」と先生の言ったことと、「学ぶ」とはどういうことか、この二つを照し合せ、自分なりに考えてみた。自分は確かに「ダチョウ」だと思う。それも檻の中で産声をあげた、本当のダチョウがどういうものかも知らず、ただ今迄、係員の人や見物人の客が与えてくれるものを吸収してきた。そしてそれが本当の生活だと思って生かされてきた。しかし、最近になって、檻の鍵を開け、本当の「ダチョウ」がどういう者か教えてくれた「人」がいる。

本当のダチョウは、アフリカの広大な大地で、自由に走り回

り、そして、与えられた物を吸収するのではなく自分で吸収するための獲物をとらえて生きていると言う。「学ぶ」ということがどういうことか、それは檻の中でただ与えられた物を吸収するのではなく、アフリカの大地でダチョウみずから走り回り、獲物をとらえ吸収していくものであって、この時の「えもの」が「先生」というものだと思う。檻の中の獲物は「えもの」でなく「食べ物」であって、時間さえくればいつでも好きな時に食べ物が吸収させてくれる。だからまったくなんの苦労もせず「らく」して生きていける。アフリカでは、生きるためにたくさんの苦労をして、自分自身で生きなければならない。そしてその苦労がやがては、自分のためになっていく。「楽」・「苦」・「狭い檻」と「広い大地」ダチョウがどちらをえらぶか、そして鍵のあいたとびらから飛び出しアフリカで苦労して生きるか、それとも自分で鍵をもう一度しめ、狭い檻の中で楽しく生きるか、それを最終的に決めるのは人ではなく、やっぱりダチョウ自身だと思う。

伯川浩子

体験を経験に変えて、始めて学ぶことが成立する!!

先生が口に出した言葉の中で一番印象づけられた言葉である。私達は、今まで体験と経験はどこがどう違うかなんて考えても見なかった。私達はただなんとなく学ぶということの意味がわかったふりをして頭でうなずき、わかったような顔をして先生達の話しを聞いてきた。そがが何のプラスになったと言うのだろう。

ただ芝居をしてきただけではないか……?

芝居を教えこまれただけではないか……?

私には、五歳はなれた弟がいる。この弟も、いやすべての弟、妹達も同じ芝居をくり返し教えこまれていくだろう。私達は、国語の10時間をとざされ、考え、体験を経験にかえてきたが、弟妹達にそんな時間をやれる教師がその時どれだけいるだろう。先生が言った人間公害としての恐るべき人間がどんどん増加しているのだ。私の弟に10時間の体験を話しても、わかる年ではないが、話してみた。弟はあっけらかんな顔をして、最初先生から言われた時の私の気持ちを言葉で帰した。「なん言いよっとや」と。でも、いつか考える日が来ることを期待したい。二人で話してみたい!!

休験を経験にかえる。難しそうで、難しくはないと思う。私達が昔にもどり素直な時期にもどればいい、でもそんなことができるはずはない。そう、私達の次の世代へ、導いていけばよい。

こうして書いたことが私の結末である。私は少しだが大人としての考え方がわかったような気がしてうれしい。

松田真由美

授業を打ち切られてからの十時間、いったいどれだけの事を

学び、どれだけプラスになっただろう。確かにみんなそれぞれ少しは変わった。しかし、まだまだ考えが甘いと思う。もちろん自分も含めてだが……討論会では最後の方はみんな自分の意見を言っていたけど、女子の方は男子に対する熱意が足りなかったと思う。もっともっと熱意を込めて自分達の考えを知ってもらわなければならなかった。そうすれば男子全員が真剣になってくれただろう。男子の方は十時間という時の経過を簡単に考えていたのだろう。何の為の十時間だったのか。何の為の長い時間だったのか。これからの授業を本物にする為ではないのか。私達一年三組の為じゃなかったのか。この点については女子も同じだ。

みんなが授業と言うものに対して受け身になりすぎていたのだ。授業は私達のものだ。私達が授業をやるんだ。生けれて初めて「学ぶ」と言うことを真剣に考えたが、やっぱり答えはこれしかなかった。「授業をやるんだ」と……

難しい言葉はいらないと思う。とにかくやる気になり、あとはどうすればもっといろいろなことを知る事ができるかを考えればいいのだ。それには教師を使えばいいんだ。ボロボロになるまで。いろいろな事を学んだがやっぱり一番うれしかったのは先生が私達を対当に見てくれたことだ。今まで習った先生には何かひけ目を感じていた。さも自分が偉いんだ、そんな感じがどの先生にもあった。だけど対当に見られるということはうれしい反面、責任も大きくなる。対当に見られたからにはそれなりの考えをもたなくてはならない。少し自信はないが……これからの授業、どうなるかわからないが、だけど力いっぱい授業をやる。今までの努力をふいにしたくはない。また一つ学ぶことを知った。

それから余談だが一つとても腹が立った。

Y先生のことだ。

この前先生が「事の起りは何なんだ」と聞かれて、だれかが「授業に対して反応がないから」と答えたのを聞いて、「なんだ、たったそのくらいのことでか」と言われたのを聞いて、とても腹が立った、くやしかった。だけどそれに何も言い返すことのできなかった自分にもっと腹が立った。

三、情念を表出する方法として

―― 表物指導計画 ――

これまであげた例は、書く情念について考えるための作品例であるが、これらの作品に表現技術の指導が加えられれば、もっとすぐれた文章になっただろう。

表現技術の習得は、これも学ぶことの意味の本質にかかわることだが、学習者にとって単なる技術の習得と意識されてはならない。自分の中にまず書きたいことがあふれ、その情念を表出し、的確に他の人へ伝えるためには、技術の習得とことばの感性を磨くことが不可欠であるという自覚が必要だ。

今年は一年の国語Ⅰと三年の国語Ⅱにおいて、主題単元ごとのまとめを兼ねて文章表現学習を組んでみることにした。

ポイントは次の四点に置いている。

1、〔取材と動機〕価値ある材料を摘える。深い情念と思考を持つ。

2、〔表記法〕基礎としての表記法を身につける。原稿用紙の使い方を身につける。

3、〔構成〕文章全体を論理的・効果的に構成する力を養う。書き出しの文、しめくくりの文を全体の位置づけの中で工夫する。

4、〔表書と感性〕語い力、文法に合った表現、ことばの知識を身につけ、ことばを使いこなす力をつける。ことばに対する感性を磨く。

このうち2に関しては、丁寧に指導すれば比較的早い時期に身につくだろうが、1、3、4は常に力を伸ばし続けなければならない。

1、については、これまで述べてきた。授業におけるたゆまぬ刺激と、生徒の語り合いが重要だと思う。

2、4、については、国語教室通信などを活用する。

3、については、生徒がある程度文章構成になれるまで徹底した指導を要する。

▒国語Ⅰにおける主題単元と表現の年間計画

（一九八四年度　一年）

教科書は尚学図書「国語Ⅰ」▼印は自主教材

単元1〔春の光の中で〕

「春暁」

「富士山」

「甃のうへ」

▼「田舎の児桜の散るを見て泣く事」

単元のまとめ・和紙はり絵と詩のあるカレンダーづくり

・随筆「季節の中」

単元2〔古典入門〕

「絵仏師良秀」

文法学習

▼「竹取物語」

漢文訓読法・格言

単元3〔人間の心理〕古典説話と芥川龍之介

「羅生門」

▼「竜」

▼「鼻」

▼「六の宮の姫君」

単元のまとめ・小レポート（比較読みの方法。レポートの書き方）

単元4〔考えるヒント〕疑問と思考

「素直な疑問符」

「矛盾」

「推敲」

「徒然草」

「幸福」

単元のまとめ・意見文「私の疑問・私の価値観」
単元5〔戦争をみつめる〕
「沖縄の手記から」
▼
単元のまとめ・感想文
単元6〔人間の絆〕
「伊勢の的矢の日和山」
「死にたまふ母」
「銅の時代」
「津軽」
「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
「送元二使安西」
単元のまとめ・「人間の絆」（個体史）
単元7〔歴史と人間〕
「鶏口牛後」
「四面楚歌」
「春望」「登高」
「涼州詞」
「平家物語」　＜群読＞
単元のまとめ・小論文「歴史と人間」（作品と時代背景の年表づくり）
単元8〔孤独と漂泊〕
「文学を生む心」
「屋根の上のサワン」
石川啄木
松尾芭蕉
単元9〔感性の伝統〕
万葉集
古今集
与謝蕪村
近代短歌
近代俳句
▼
単元のまとめ・小論文

単元1、の随筆では、原稿用紙の使い方を丁寧に指示しおおまかに三段構成を頭において書くことと、書き出しを工夫することだけ注意した。

▒個人文集づくりをめざして――個体史を中心に

自己紹介と他己紹介
自己添削と自己評価
（一九八四年度　三年）

昨年から持ち上がった三年家政科では、卒業前の個人文集づくりを目標において、学習を計画している。

単元1〔流離の魂〕
「楢」
・随筆「母との絆・母からの自立」
「西行と新古今集」
「奥の細道」

単元2〔個人文集をつくる〕
・自分史年表
・随筆「母との絆・母からの自立」の自己添削、自己評価
・人物紹介「自己紹介と他己紹介」

単元3〔風土と土着〕
「切支丹の里」
「沈黙」
・夏休みグループ研究「長崎の歴史と文学」

単元4〔長崎から――過去・現在・未来への視点〕

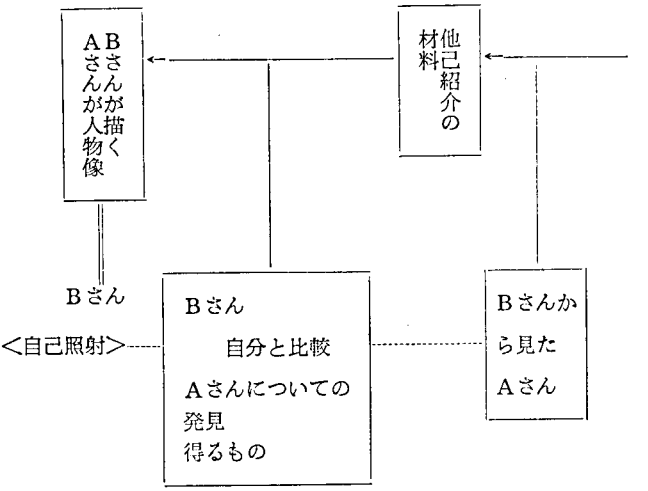
単元5〔女性が創るもの〕
・できれば、子ども劇場のお母さんたちとの座談会を、
↓聞き書き

※自己紹介と他己紹介

Aさん

自己紹介

自己分析
自己評価 ×過大 ×過小 (正当に)
不明の部分
変化に伴う揺れ
も含めて
明らかにできる部分を明らかにしていく
自分の歴史を語る



◎○△×

文章表現　評価表	単元：〔個人文集をつくる〕 テーマ：自己紹介と他己紹介 文章の種類：紹介文（人物描写・自己照射・個体史）	題　たび人――生 3年1組35番　氏名　本多史枝

	評価項目	自己評価	相互評価	Tの評価	文章表現に関する通信欄
内容	○価値のある題材が選ばれているか。	○		○	Tへ相手に印象づける言葉が頭になかなか浮かばなくて苦労した。 まだまだ沢山の本を読んで「印象づける言葉」を得ていたいと思っている。 初めての他己紹介―。大幅なプラスがあった。
	○その人物が生き生きと描かれているか。	△		△	
	○その人物の人格形成の背景が分析されているか。	○		○	
	○その人物に対する書き手の思いがきちんと述べられているか。	△		△	
構成	○段落構成が効果的に意識され，展開が工夫されているか。	△		△	（　　）から（　　）へ
	○書き出しが効果的か。	◎		○	
	○結びで文章全体がきちんとしめくくられているか。	△		○	
文章	○文章は簡潔でわかりやすいか。	○		△	Tから，まだ荒けずりだけど史枝さんの文章私の好きなタイプだな。歯切れがいいし骨太さがある。 ただ，説明が不十分だったり，必要以上に大げさなことばづかいをしている箇所が多くて，マイナスになっいる，読み手にとって，わかりやすいかどうか，その点を気をつけて書くようにしよう。
	○文脈の乱れはないか。	○		○	
	○文章に説得力ハリがあるか。	○		△	
基礎	○文末に常体とていねい体の混用はないか。	○		○	
	○原稿用紙の使い方は正しいか。	△		○	
	○誤字・脱字はないか。文字は読みやすいか。	△		○	